新刊紹介

堀田あゆみ、渡邊三津子、鈴木康平編著『モンゴルにおける木材利用と森林後退：19世紀末から20世紀前半の写真より』

広　川　佐　保

ウランバートルは、古くは「囲い」を意味するフレー（漢字で庫倫）、イフ・フレー、もしくは宮殿を意味する「ウルガ」（モンゴル語ではウルグー）と呼ばれた。この「囲い」や「宮殿」は、木材によって造られたはずであるが、これらはどのように調達されてきたのであろうか。本書はこのような問いに直接答える好著である。（なお、本書では旧ウランバートル全体を「ウルガ」とし、中央寺院地区を「フレー」と統一している。）

科学研究費「モンゴルにおける画像記録を用いた地域像の再構築」プロジェクト（代表：小長谷有紀氏、https://historicimages.mn）、および、鳥取大学乾燥地研究センターの共同研究（代表：小長谷有紀氏）の成果として出版された本書の課題は、モンゴルの首都ウランバートルを中心とする木材・森林資源の利用のありかたや都市建設、そしてこれにともなうモンゴルの森林の変遷を明らかにすることである。また、資料として絵図と古写真を用いつつ、文化人類学、建築史、歴史学、森林生態学、地理学、植生学などの分野から、モンゴルの森林の利用や現況について分析が行われる。

本書の目次は以下の通りである。なお、コラムは省略した。

序章　木へのまなざし（小長谷有紀）
第１章　絵図と古写真から読み解くウランバートルの景観（渡邊三津子）
第２章　都市の拡大と木材利用（八尾廣）
第３章　ハンガイ地域における遊牧民の森林資源利用（堀田あゆみ）
第４章　社会主義時代のモンゴルにおける木材の生産と消費（滝口良）
第５章　屋根付き牧柵の浸透－木材消費の現場としての牧畜社会（辛嶋博善）
第６章　森林の変遷（鈴木康平）
第７章　森へのまなざし（山中典和）

序章では、まず木材や森林という観点からモンゴルへアプローチするという、本書の研究手法が説明される。本書の特色の一つである絵図の利用について、モンゴルの著名な画家ジュグデルによるウルガの絵図（1913年）、およびシャラブの絵図「モンゴルの１日」（1910年代）が取り上げられる。また古写真として、ノルウェー出身のビジネスマン、オスカー・

マーメンの写真コレクション（モンゴル関係は約3000枚）のほか、モンゴル、ロシア、アメリカ、ノルウェー、デンマークなどに保存されるオンラインの写真資料が利用される（使用写真は巻末に掲載されている）。このほかに、同時代のモンゴル社会を記録したポズネーエフの著作も木材について重要な記録となっている。これら20世紀初めのフレーの絵図と古写真を照らし合わせた結果、町中の建物を囲んだ柵が丸太であったことや、フレーのあちこちに薪や木材が積み上げられた「木材タワー」が存在したことが明らかにされ、たいへん興味深い。フレーにおいて、木材は町の建設や燃料の貴重な資源であり、また輸出産品として重要であったことから、フレーを「木材の町」と位置付けるなど、オリジナルな視点が提示されている。

第１章「絵図と古写真から読み解くウランバートルの景観」では、ジュグデルの絵図とマーメンの残した古写真から、ウランバートルの景観や空間配置を明らかにし、それによって写真の撮影場所を同定する方法が提示される。絵図と古写真を比較することで、読者は、20世紀初頭の売買城（ナイマーホト）、ロシア領事館やモンゴロル（金鉱採掘事務所）、フレー中心部の寺院や宮殿、フレー市場、木材タワーなどを、より具体的・立体的に把握することができる。またこれまでジュグデルの絵図ではわからなかった景観（毛皮市場）も、マーメンの古写真によって明らかにされている。細かいことであるが、売買城のそばに中国人の「棺桶置き場」が存在するなど、モンゴルの漢人社会において中国の「落葉帰根」に基づく「運棺」が行われていたことが、新たな発見であった。なお、評者の手元にある写真集にも、中国式家屋の屋根の上に木材が積まれている写真があるが、本書を読むまで評者はこれをレンガと考えていた。このように、写真と絵図の比較検討により、新たなモンゴル社会像を提示することに成功している。また、著者の渡邊氏は将来的に現代のウランバートルの景観との比較検討をも計画されているとのことで、今後の研究の発展が楽しみである。

第２章「都市の拡大と木材利用」では、19世紀から現代にいたるウランバートルの都市と建築の発展の歴史について検討されている。ウランバートルは、ジェブツンダムバ・ホトクトの寺院に由来し、17世紀以降、何度も移動を繰り返しながら、現在の位置に定着した。本章では、まず交易都市ウルガの特徴、および都市建設について説明がなされ、清朝時代の仏教寺院のみならず、1910年代頃のロシア風建築物でも、木材が重要な建築資材であり、レンガの利用は少なかったと述べる。社会主義時代、モンゴル人民共和国では、1930年代後半から近代的な都市計画が進められ、古い時代のフレーの街並みは一掃された。さらに本章では、市場経済化以降、大きく変化するウランバートルについて、国家の都市計画の変遷、ゲル地区の拡大やバイシン（固定住宅）の建設、そして資材の変化などが、緻密な調査をもとに描き出されている。このような変化とともに、現在のモンゴル人自身の住居に対する取り組みについても紹介されている。本章からは、歴史が何層にも積み重なったウランバートルの街並みが浮かび上がってくるであろう。

第３章「ハンガイ地域における遊牧民の森林資源利用」では、マイナー・サブシステンス

（副次的な生業）に注目しつつ、森林資源が豊富なハンガイ地域における、牧民の森林資源の利用実態を明らかにする。モンゴル語の「ハンガイ」とは、高原状で森林が多く水の豊富な土地を指し、本章ではアルハンガイ地域が研究対象となる。ここではシャラブの絵図と照らし合わせながら、牧民が利用してきた森林資源として、ボヒ（マツの樹皮）、サマル（シベリアマツの実）、ベリーなどが紹介される。また、アルハンガイの人々は、木材をゲルの資材として消費するほか、薪や家畜囲い、物置としても活用しているという。これにくわえ、草原のあちこちで見かける「物置」や「家畜囲い」の由来と利用方法が具体的に記され、評者もこれまで見落とされがちであったモンゴル社会の側面に気づかされた。しかし近年、雪害（ゾド）の頻発や、木材を大量に伐採できるチェーンソーの登場によって、森林資源の利用のバランスが変化しつつあるという。なお、コラム「絵画に描かれた松の実」（滝口良）、および「古写真のなかの野生哺乳類」（伊藤健彦）にも、自然環境の変化とモンゴル社会との関係が描かれている。

第 4 章「社会主義時代のモンゴルにおける木材の生産と消費」は、近代ウランバートルの固定家屋の「囲い（あるいは柵）」に注目し、その木材生産と林業の歴史をたどる。本章では、酷寒のウランバートルにおいて、都市化にともない、大量の薪を必要としたこと、そしてこれらの木材が周辺から伐採され運び込まれたことが記される。20世紀前半、木材の伐採は、森林資源の枯渇を招き、そのためボグド・ハーン政権期にロシア人の発案により森林管理が試みられ、後にモンゴル人民共和国でも森林資源の利用制限や課税に取り組んだ。その一方で1945年以降は、モンゴル人民共和国全域における工業化と都市化の推進により、木材需要がさらに高まってゆく。同時に人民共和国では、ソビエト連邦の協力により科学的調査と林学が発展したため、森林資源がより詳細に把握され、これらの集約と工業化が進んでゆく。森林の利用と保護の背景に、近代モンゴルにおける中国商人やロシア人商人の活動の消長、そして社会主義時代の政策があり、これらが現在のモンゴルの暮らしと綿密につながっていることがわかる。

第 5 章「屋根付き牧柵の浸透－木材消費の現場としての牧畜社会」では、社会主義時代のモンゴル牧畜社会における牧畜政策と木材をさぐるために、「家畜用ハシャー（牧柵）」に注目する。牧柵は、一般的に木製で屋根付きのものがあり、家畜を冬の寒さから守る役目を果たす。本章によれば、牧畜用の柵は社会主義時代、政府や党の主導と支援により普及した。またモンゴル人民共和国では、1940年代から牧畜の指南書や教科書の出版が進められていくが、時代が下るにつれて、ハシャー（とりわけ屋根付きハシャー）の設置が奨励されるようになった。本章から草原でしばしば目にするハシャーの背景に、第二次世界大戦時の家畜調達や、牧民への教育、そしてゾド対策など、牧畜政策の試行錯誤の歴史があったことがわかる。社会主義時代のモンゴルにおいて、近代的な遊牧の知識がどのように伝えられたのか考えるうえでも興味深い。

第 6 章「森林の変遷」は、1930年代の写真、旅行記、報告書などの記録と、衛星画像によ

る現在の森林の状態を比較することで、森林景観の変化を明らかにする試みである。本章では、まずモンゴルの森林の全体像を概観し、さらにヘンティー地域(ウランバートル北東部)、フブスグル・ハンガイ地域、アルタイ地域、モンゴル東部地域、ゴビ地域の森林の植生について説明する。そのうえで、1930年代に地理学者のA.D.シムコフが作成した植生図と現在のデータを比較することで、森林の分布範囲の変化を明らかにする。その結果、モンゴルでは1930年代に比べて、森林の縮小がみられるという。その第一の要因として、とりわけ第二次世界大戦後、社会主義時代に一部の地域で強度の森林伐採が進んだことが指摘され、第二の要因として、火災による森林の消失が挙げられている。また上述の各地域における森林の変化についても検討されている。このように長期的な視野から、モンゴルの森林の履歴情報を活用することで、今後の森林の持続的利用や管理につながる可能性を示唆する。

第７章「森へのまなざし」は、本書の内容を総括するとともに、モンゴルが、シベリアの広大な針葉樹林につながる「森林の国」であることが改めて強調される。本書のなかで明らかにされたように、ウランバートルの発展には、森林からの木材資源やエネルギーの供給が大きな役割を果たしていた。しかし都市の拡大は過度の森林伐採を招き、現在では森林の衰退と消失にくわえ、森林火災、病害虫の被害が、複合的に森林に影響を与え続けていることが指摘される。また今後は、気候変動の影響も予測され、森林ステップが草原に移行する可能性も示唆される。そのため現在モンゴル国では、森林後退に対応するための植林事業が推進されつつあるが、困難にも直面しているという。今後の変化に対応するためにも、古写真や絵図などのアーカイブからモンゴルの森林の100年をとらえなおすことの重要性が示されているといえよう。

以上、評者の関心の赴くままに本書の成果と魅力を記した。本書は、森林や木材という視点から、近代モンゴル社会の変化をとらえなおす試みであり、異なる分野の研究成果を融合させることに成功している。これまでも古写真を用いた研究自体は数多く存在するが、「資源」としての森林に着目する視点はほとんどなかった。このような視点で古写真を見返した場合、たとえば中国東北地域研究においても、新たな発見が生まれるのではないだろうか。また、いずれの論考も過去から現在、未来につながる視点から検討されており、内陸アジア社会の現状を分析するうえでもたいへん有益である。

1990年代にはじめてウランバートルを訪問した評者には、当時のカラフルな社会主義時代の建物が印象的であった。一方で、近年のモンゴル国をめぐる変化は著しく、とりわけ都市の景観は大きく様変わりしている。少し前になるが、評者は2011年９月にモンゴル国の歴史学者バトサイハン氏の案内により、旧売買城（現在のアムガラン）に残る中国式建築の建物と、モンゴロル社の建物（本書にも登場する）を訪問した。前者は、アムガランに残る、ジャンジン・クラブ（社会主義時代の文化宮殿、劇場）わきの清代の中国式家屋（書店とされる）である。当時中国式家屋は、家屋の骨組みとレンガの壁が露出しており、すでに骨組みの一部は薪として再利用されていた。現在、Googleマップで見た限りでは、建物の存在を確認す

ることができない（2022年12月）。また、モンゴロル社の家屋は、かつてロシア白軍のウンゲルンが占拠したことでも知られるが、2011年の訪問のさいは往時の姿をとどめ、病院（Mongem Hospital）として使用されていた。同じく病院のホームページやGoogleマップで確認すると、近年大幅な外装工事がなされたようで、外観は一新されている。それゆえに、本書によって示された、写真や絵図を活用する研究手法は、大変動のただ中にあるモンゴル社会のあり方を明らかにするうえで、大きな可能性を秘めているであろう。

堀田あゆみ、渡邊三津子、鈴木康平編著『モンゴルにおける木材利用と森林後退：19世紀末から20世紀前半の写真より』遊文舎、2022年、268頁